

土佐光武 (下)

松尾芳樹

明治8年(1875)7月4日、土佐本家の光章が28歳の若さで亡くなる。本家は64歳の光文がまだ4歳になったばかりの光一を擁するのみとなった。光文は明治9年、11年の京都博覧会に賞状(旧目録番号361)を受けるなどまだ現役で活動が続けていたが、土佐の家業を中心に立って担う負担もあったのか、やがて明治12年11月9日に亡くなり、土佐家の興亡は分家光武の双肩に託されることとなった。

「土佐派絵画資料目録(二)」に収録される明治9年(1876)五月に光武が山口徳兵衛から借金をした証文(目録番号45)も、そうした当時の土佐家の状況を考えあわせると興味ある資料といえる。というのも「無據要用二付」借用した金額は85円という相当なもので、到底日常生活に関わる借金とは思えないからである。当時の土佐家の財政を窺わせる資料がないため断定はできないのだが、光章没後の土佐家を支えるための入り用であった可能性も否定できない。

沿革史別冊 畫学校出仕人名簿(原本縦書き)

京都府士族	
土佐派	
明治十三年六月十九日出仕拜命	土佐光武
上京区廿五組麴屋町丸太町下ル	天保十五年三月廿二日
室町通下立賣上ル西側	
父 画所預從四位下土佐守光清亡	

ここに掲載したのは、京都府画学校の出仕すなわち教員の名簿で、明治13年(1880)から明治21年(1888)にわたる97名の住所氏名が綴られている。先の履歴書と比べると、住所が同じ上京区廿五組にありながら下御霊前町

から麴屋町丸太町下ルすなわち舟屋町に変わっている。この名簿がいつ頃つくられたものか明確にし難いが、下御霊前町が幕末期土佐家の住地であったことは確かだから、履歴書以後のものであることは間違いない。また、この簿冊が使用されている間にその住所が一部訂正されているところから、明治21年までに室町通下立賣上ル西側すなわち勘解由小路町に移ったことも分る。加えて、明治26年(1893)に光武が自作の神武天皇像を梅屋尋常小学校に収めるため上京區長宛て寄付を願い出た書類(旧目録番号360)に記載された住所は上京區丸太町通釜座角梅屋町となっており、光武は少なくとも三度転居していることが確認されるのである。

こうした転居が土佐家の興亡とどのように関わっているのか不明の点ばかりだが、明治16年(1883)に命じられた殿丁の仕事のためか、御所の周辺から離れていないことは注目される。

明治19年(1886)に光武は長男常若を失った。それは18才とあまりにも若い死だった。彼が嫡男を失った悲しみはどれほどのものであったか察するに余り有るが、思えば光武は家族に不幸の多い人物であった。明治8年(1875)には妻定子を失い、明治21年(1888)には5才の二女春子を失っている。そして明治38年(1905)には三男光宴をこれもまた27才の若さで失う。こうした不幸が光武の行動に関わるものがあつたかもしれない。

一方、画業の上で宮内省と光武の関わりを示す資料として注目すべきは、明治23年(1890)9月東京青山御所改築にあたり内匠寮が光武に対し杉戸絵を描くことを命じた辞令(旧目録番号360)であろう。

青山御所御用辞令(原本縦書き、宮内省用箋)

土佐光武
青山御所御座所御改築用杉戸畫
工其許へ申付二相成候早々上京
着手可紋此段相達候也
明治二十三年九月十九日
内匠寮團(内匠ノ寮印)

絵所預であった歴史からいっても土佐家の面目を保つものとして光武自身、この御用に特別の意味を感じていたようである。『絵画叢誌』43号(同年10月)にこの時の光武に関する記事が収録されている。

○和畫の名譽 近來和畫の衰頹せしハ人みな口にする所なるが就中京都府下に於て歴代畫所の預たりし土佐家の如きは誠に微々たる有様にて哀れを極めたりしを賢き御あたりにも國風を挽回せらるべき御主意にもや有けん當代の畫家土佐光武氏へ青山御所のお杉戸の繪を命ぜられたるを同氏は生涯の面目かつは家門再興の時節到來なりと大きに喜び取敢えず門人本部有數氏と同行して上京し麴町區有樂町稻田某方に止宿して稿を草し既に頃日大方御治定に相成たるよりその畫様は住吉松島むしろ田等なりと

ここに記されているとおり土佐家の再興を望み奔走する光武の態度はこの頃極めて明確な形で行動に表れる。明治24年(1891)5月に光武は円山に於いて、土佐派の書画会を開催しようとしたらしく、『絵画叢誌』48号(同年3月)に以下の記事が見える。

○土佐派書畫會 西京の畫家土佐光武氏は本年は曩祖土佐光信先代同光文の年回到當るを以て來る五月九日を卜し洛東圓山に於て一大書畫會を開設する由にて既に東京府下の出品は同流の高弟にて本會學藝委員なる川崎千虎氏へ委依囑ありたれば同氏が採集に奔走せらるゝ趣きなり

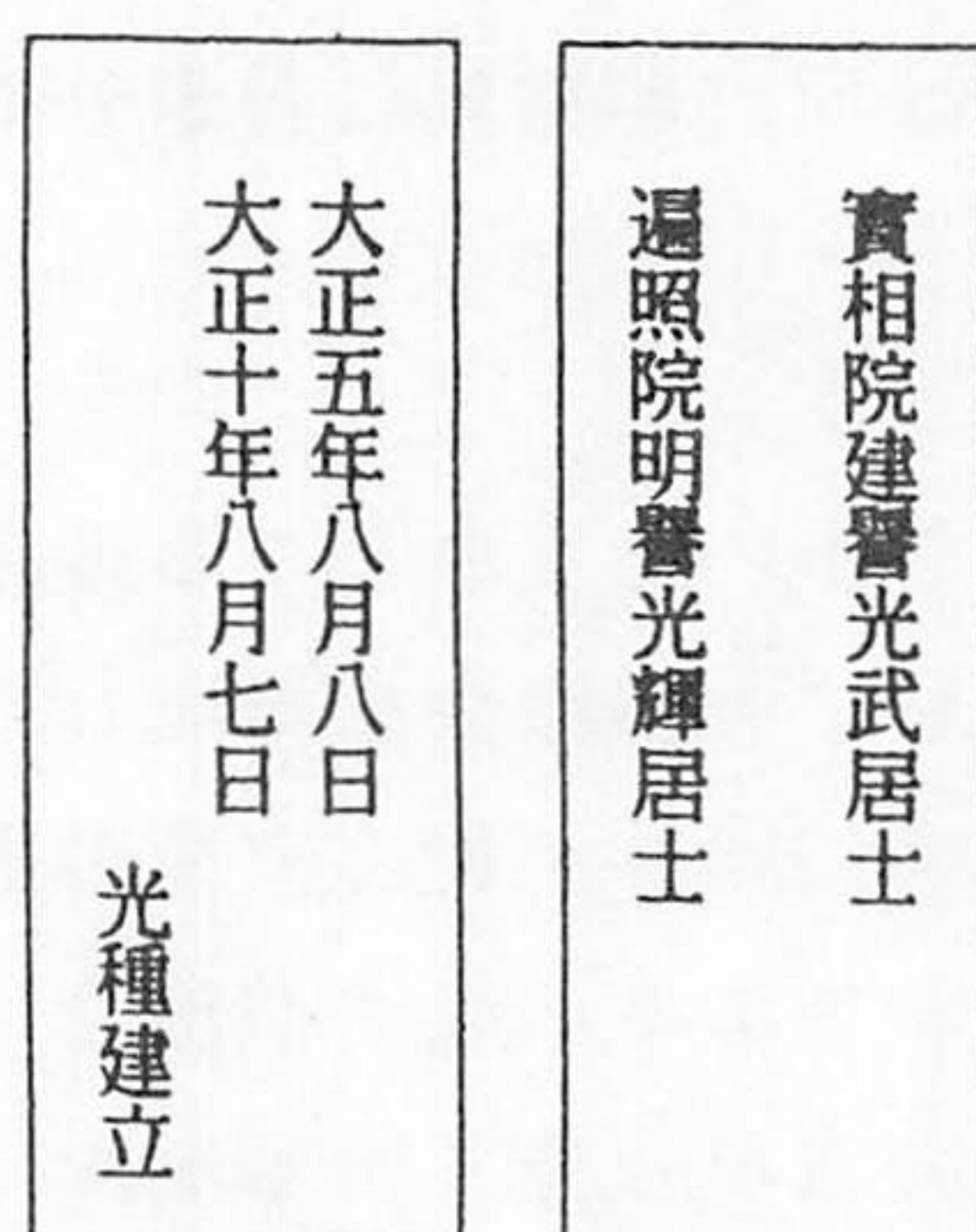
この書画会が実際に開催に至ったかどうか、いまのところ確証がないが、明治26年6月には榊原長敬ら10余名とともに大和絵会を結成したというから(『京都府百年の歴史－美術工芸編』による)、土佐の家業の正統性を謳い、その発展を大いに画策したことは確かである。光武が丹念に土佐家の粉本を整理したのも、その画題別分類の方法から見て粉本を単に収蔵するためではなく、現実の制作資料として活用しようとしたためと考えられる。光武の家業再興への情熱は敬服に値するものであった。

その他彼と宮内省の関わりを示す資料として、明治19年(1886)4月に賀

茂祭参向を、同9月に男山祭参向を命じた辞令がある(旧目録番号360)。明治17年(1884)に復活したばかりの両祭だが、その参加が画事に関わるものであったかどうかは分らない。本資料の中には江戸後期の賀茂祭や仁孝天皇の葬列などの行列記録が幾つか遺されており、放生会のものなども含まれているから、こうした伝統を受け継いで行列記録にあたったことも考えられよう。但し、資料の中にこの時の行列記録は見えない。

土佐光武の墓は京都百萬遍知恩寺の土佐家墓所にあり、墓石には土佐光武と土佐光輝二人の名が刻まれている。裏面に二つの没年が刻まれているが、この銘については少し注意が必要で、そのまま読めば大正10年(1921)8月7日が光武、大正5年(1916)8月8日が光輝の忌日ということになる。すると、光輝が先に亡くなり土佐家最後の人は光武その人ということになるのだが、本学に伝えられた資料から見るとこれは一般とは逆順に刻まれたと考えるべきだろう。

大正5年12月24日付で大日本興徳會から土佐家に寄せられた伝達状(旧目録番号360)は、光武が北畠親房像を描き日光の先賢堂に寄贈した礼として祖先菩提のため僧正彦坂謹照が六字名号を土佐家に贈るという内容である。この時光武が描いた絵の下絵が『土佐派絵画資料目録(二)』目録番号84の「北畠親房像」と考えられるのだが、その宛て名には土佐光輝の名が記されている。光輝の没年を大正5年とするとこの伝達状は光輝の亡くなった日から4ヶ月も後のこととなってしまふ。差し出し人の迂濶さと云うにはあまりにも無理があるだろう。墓碑の大正10年を光輝の没年とすれば、



裏

表

土佐光武・光輝墓碑

土佐家に対する先祖菩提の名号を、絵を描いた光武自身ではなく光輝宛差し出した理由も説明できる。つまり光武の没年が大正5年8月8日である。そのとき72才であった。

一方光輝の没年が大正10年8月7日とすれば、その年令が気になるころである。本資料の中に明治23年(1890)に光輝が描いた写生帖(旧目録番号403)があり、その墨書の中に墨消ししているが「十七才寫之」と

読めるものがあるから、その生年は明治5～6年(1872～3)と考えられる。嫡男常若及び三男光宴の墓碑銘から判断される彼らの生年と比較すると、光武二男と考えてよいだろう。従って、彼は48～9才と随分早くに亡くなったことになる。先の印類中に光輝のものも数種含まれているが、「光輝印信」印は己丑の年すなわち明治22年のものだから光輝16～7才の時期に作られたことになる。恐らく彼はこの頃本格的に画の修業を始めたのであろう。別の印類の側款によれば明治35年(1902)に光武同様に光輝も「先生」と呼ばれており、この頃には画家としてそれなりの活動をしていたと考えられる。彼は画業の上でも正しく土佐分家最後の人であった。

ここで触れておきたいのが、本学に伝えられた「土佐派絵画資料」伝来の経緯に関する疑問である。本資料は、例えば「平家物語絵巻模本」(旧目録外別-10)の尾紙に記された「此絵巻下絵は土佐光輝氏が画業を廃して移転に際して襲蔵品を売却したるを一括購入したるもの一也／昭和二十六年五月下浣／佳識 圃」というような墨書によって、あたかも、松井氏が土佐光輝より譲り受けたものと見なされていたからである。しかし光輝の没年がはっきりとした現在、松井氏がこの資料を入手したと考えられる昭和20年代には、もちろん光輝は亡く、両者が直接交渉した可能性はない。すなわち、光輝の廃業と松井氏の購入の間には約30年間の空白があり、その間に他の所蔵者または管理者がいたことが推察されるのである。

松井氏の墨書に従えば、光武が没した大正5年から自身が亡くなる同10年の間に光輝は画業を廃し粉本を売却して京都を離れたことになる。これは光輝が東京で没したか京都で没したかという問題と関わることもあって、興味のあるところだが、今この5年間の彼の行動を裏付ける資料はない。また両者の墓を建立した光種という人物は、光武の子とも思われるがこれもまた不明である。

明治20年代には精力的に土佐家再興を願い積極的な活動を試みた光武であったが、晩年の消息には不明な部分が多い。本資料に含まれる土佐家関係の書簡数は少なくないが、現在調査が終わっていないため、そこに含まれているはずの光武資料をここに生かすことができず、本稿をまとめるにあたり最も残念なことであった。そのため推測に頼らざるを得ないところも多く、あるいは真実と齟齬するところがあるだろうが、機会があれば新資料を紹介し遺族からの聞き取りを行うなどして、追加訂正を試みたい。